

【ファン促物語】

名著「人を動かす」のエッセンスを物語化



## ①ツヨシ店長、 心ない対応をする

## ②ツヨシ店長、 初めて感謝を伝えてみる

ファン促物語ライター  
真喜屋実行(まきやさねゆき)  
あなたの思い・ノウハウ・商品・サービスを物語にします。

(株)はぴっく 横浜市中区翁町2-8-5  
045-263-9070  
haptic@mirror.ocn.ne.jp

## ツヨシ店長、心ない対応をする

---

ツヨシは店長室にこもっていた。  
営業開始30前、翌週のシフト作りを急いでいる。

コンコン  
店長室のドアをノックする音がした。

「はあい、だれ〜？」

ツヨシがゆっくりとドアを開けると、レイジが笑顔で立っていた。

「おおレイジ。おはよう」  
「おはようございます店長！これ、買ってきましたよ！」

レイジがあげた手には  
16ロール入りのトイレトペーパーのパックが握られていた。

「うあ、買ってきちゃったの…。  
オレも発注したからもう来てるよ」

「…あ、そうなんですか」

「まあいいや、倉庫入れといて」

ツヨシは右手を出してレイジに領収書を要求した。

「そうそう、買うのはいいんだけどさ、  
これからは買うなら聞いてからにしてくれよな」

その日の営業終了後、「お先に失礼します」という  
レイジの表情はいつもと違って見えた。

目を合わせず、ただ口で挨拶だけしてそそくさと帰って行った。  
いつもなら営業の反省を少し話していくのに。

「何だよアイツ。あいさつくらいちゃんとしてけよなあ」

翌日、仕込みに来てくれるパートのおばちゃんが  
倉庫で何やら探し物をしている。

「あんりやまあ、  
トイレットペーパーがいっぱいだねえ」

「ああゴメンネ、  
レイジのやつが勝手に買ってきちゃってさ、  
すぐに無くなると思うからしばらく我慢してよ」

「ありやあそうなのお、  
レイジちゃん偉いわねえ。あの子イイ子だもんねえ」

「いや、あいつが勝手に買ってきたから  
倉庫がいっぱいになっちゃってさ…」

「レイジちゃん偉いわあ。  
お店のこと考えてくれてるんだわねえ」

「いや…ちがくてさ」

パートのおばちゃんには  
ツヨシの言葉が届いていないようだ。

トイレットペーパーを買ってきた  
レイジに感心しきっている。

「まあいいか」と自分の作業に戻るツヨシの頭に、  
ふと「もしかしてアイツお店のことを考えてくれたのか」  
という考えがよぎった。

しかし、たまたまだろうと深くは考えなかった。

店長室でシフト作りの続きをしていると、  
ホールから低くて太い声がした。

「お疲れさん。店長いるかい？」

ツヨシはその声にびっくりして出て行くと、  
中川マネージャーが立っていた。

「中川マネージャー、どうしたんですか？」

「いやな、打ち合わせで近くまで来たからさ、  
顔出しとこうと思って」

特に用がなさそうなのに安心した。  
マネージャーが突然店に来るときはお叱りのことが多いから。

ツヨシは急いで冷たいお茶をグラスに注ぎ、  
マネージャーに差し出した。

「ああいらねえよ。オレ買って来たもん」

マネージャーは近くの自販機で買ったと思われる  
ミルクセーキの缶を手を持っていた。

「お茶もったいねえな、  
ちゃんと見てから入れろよ」

「はい…すみません」  
「ま、いいか。飲むわ、ちょうだい」

ツヨシは、マネージャーを  
素直に受け入れることができなかった。

せっかく気を遣ってお茶を入れたのに  
感謝されるどころか、面倒くさがられ、注意までされた。

もちろんそんなことは言えない。  
表情にも出ないようにしたが、  
マネージャーのことは、少し嫌いになった。

「ん？」ツヨシは何か心にひっかかるモノを感じた。

「これって、オレがレイジにしたのと同じじゃ…」

その日、レイジはシフトに入っていなかった。  
心も頭もスッキリしないツヨシには、  
それは少し救いだった。

やはりどう考えても、  
マネージャーがツヨシにした態度と、  
ツヨシがレイジにした態度は同じように思えた。

しばらくはレイジに会いたくないと思った。  
そうは言っても、レイジは店の主力スタッフ。  
明日は出勤してくる。

はあ～。  
営業が落ち着き、ツヨシは大きくため息をついた。

「どうしたんじゃ？店長」

深夜のクローズパートである金木テル夫が尋ねる。  
元気で品のいいおじいちゃんふだが、70歳をゆうに超えている。

すでに引退しているが、  
昔は仕事でも相当ぶいぶいと言わせていたらしい。

本当かどうかは分からないが、少なくとも  
シワの深さは人生経験の深さを物語っているように見える。

金木は「金木さん」と呼ばれるよりも  
「テルさん」と呼ばれる方が好きらしい。

ツヨシは、レイジとのこと、  
そして、マネージャーとのことをテルさんに話した。

「なるほどなあ、  
んで店長はどうするつもりなんじゃ？」

「う〜ん。どうしようか悩んでるんですよ。  
レイジには悪いことしちゃったかもしれないけど、  
店長がアルバイトに謝るのもねえ、  
威厳が無くなるっしょ」

「そうかいなあ？  
ほいなら店長はマネージャーが謝ってきたらどう思う？」

「…う…ん」

「威厳が無くなるから謝らないと  
マネージャーが思っていたらどうじゃ？」

「……」

ツヨシは言葉を返せなかった。  
「自分のプライドを守るために謝らないなんて

「マネージャー失格だ。そんな人についていきたくない」  
そう思ったが、口には出さなかった。

それを言ってしまえば、  
ツヨシ自身がレイジに謝ることを認めることになるからだ。  
店長がアルバイトに謝るなんて。。。

「よく考えてみるんじゃないか…ほっほっほっ…」

テルさんは楽しそうに、  
また仕事に戻っていった。

「レイジ、こないだはごめんな」

「ん？どうしたんですか？急に」

「あ、いや、オレこないだ  
レイジにひどいこと言っちゃったろ。  
トイレットペーパーの件」

「ああいいんすよ。  
ボクが聞かないで勝手に買っちゃったんですから」

「いや、オレが悪かったよ、せっかくレイジが  
お店のことを考えて買ってきてくれたんだもんな。嬉しいよ。  
トイレットペーパーなんてすぐになくなるから大丈夫。  
また気付いた時には頼むな」

はじめはメモしてきたセリフを読むだけのつもりだった。  
テルさんが、それでもやらないよりいいだろうと  
アドバイスしてくれたからだ。

でも、ツヨシが話しているうちに、  
レイジの表情はほぐれてグンと明るくなるのが分かった。

すると、ツヨシも途中からは  
用意してきたセリフではなくて  
自分の言葉で話せていた。

レイジは「はい！今日もよろしくお願いします！」と  
元気に更衣室へ向かっていった。

ツヨシも胸の中心がじわ~っと  
温かく拡がって行くのを感じた。

今日はいい営業になりそうだ。



## ツヨシ店長、初めて感謝を伝えてみる

---

23時を回りようやくホールが落ち着いてきた頃、  
グラスを洗いながらレイジが声をかけてきた。

「店長、今日もスゴかったですねえ！」

レイジは一番忙しいドリンク場を1人でこなし、  
充実しているようだった。  
頬には汗が光っていて、その表情も明るく見えた。

忙しい1日だった。  
12月半ば、忘年会シーズンになると連日大型の宴会が入る。

ただ、ほぼ全席が予約コースになるので、  
満席とは言っても仕込みを万全にしていれば  
キッチンは慌てることはない。

ホールも大皿を運ぶことが中心になり、  
客数ほどの忙しさは感じ無い。

ただしドリンクだけは別だ。  
ほぼ全席が予約コースと言うことは、  
ほぼ全席が「飲み放題コース」となるのだ。

他のポジションとは逆に、  
ドリンク場だけは客数以上の忙しさとなる。

シフトでは23時上がりとなっているが、  
レイジはまだグラスを洗っていた。  
ドリンク場は全く片付いていないようだ。

そしてもう少しで24時という頃、  
どうにか片付けたレイジは、急いで帰り支度を始めた。

「お疲れっした」と言うと、  
オレが言葉を返す間もなく走って行った。  
レイジの終電は他のスタッフよりも少し早いらしい。

「ありゃ、あっさりじゃの。店長」

オレの後ろからそう言ってきたのは  
深夜のクローズ担当のテルさんだった。

「レイジくんは1時間もがんばったのに  
ねぎらいは無しかの」

「いや、持ち場を片付けるのは当たり前じゃないですか。  
仕事なんだし。時給もついてるんだし。  
ウチでは自分の持ち場は落ちつけて帰るのがルールですから」

「そうかのお、  
ワジじゃあとても今日のドリンク場は回せんがのお…」

独り言のようにそう呟き、  
テルさんはクローズ作業に戻っていった。  
そりゃそうだろう。70歳過ぎじゃさすがに無理だ。

次の日も大忙しだった。

ただしこの日はレイジは休み。  
ドリンク場は入って3カ月の岩尾だった。

ようやく一通りのドリンクレシピは覚えたけど、  
ドピークに入るのは初めてだった。

さすがに岩尾1人じゃオーダーが追いつかない。  
オーダー伝票はみるみるうちにたまって行く。

お客さまから催促を受けると、  
その度にオレがサポートに入らなければならない。  
ピークの忙しい時間帯ほど  
オレがサポートに入る回数も増えてしまう。

「なんだよもう、忙しいな…  
レイジの奴こんな日に休みやがって…」

オレがぶつくさ言っているのが聞こえたのかもしれない。  
テルさんが近くに寄ってきた。

「ほっほっほっ…」

レイジがいない日、  
テルさんには少し早く出勤してもらっている。

テルさんは、オレに対してなのか、  
ひとり言なのか分からないくらいの声でつぶやいた。

「レイジくんは大切な人材ということですねあ…」

何を当たり前のことを言っているんだと思った。  
レイジは2年もやっているんだから、  
岩尾より能力があるのは当たり前だ。  
もちろん時給だって50円も高い。

「うむうむ…大切な人材かあ…。  
それも伝えなきゃ伝わらんからのお」

テルさんはもう一言、大きめの声でつぶやいた。  
オレに何か言いたいようだ。  
少し面倒くさくなったオレは、少し口調を強くして言った。

「よく言ってますよ、頼りにしてるって」

これは本当だ。

シフトを作る時よくレイジに言っている。

「うむ…ほうか。それはいいことじゃあ。

ただ、お願いする時にだけ褒めても伝わらんぞお。

伝えるべき時に伝えなくてはな…」

シフトのことをテルさんが知ってるはずはない。

見透かされているような気がした。

シフトをお願いする時のねぎらいや褒め言葉は、

レイジに感謝してと言うよりも、

シフトが埋めることが目的になっているというのは

自分でも分かってはいる。

「ほっほっほっ…

ちと考えてみるんじゃな…」

そう言うと、

テルさんは持ち場に戻って行った。

次の日も同じように予約で満席だった。

今日のドリンク場担当はレイジだ。

やっぱりレイジがいると楽だ。スムーズに回る。

どんなに注文が入っても、

レイジなら1人で何とかしてくれる。

オレも安心してホールを見ていることができた。

ふとテルさんが言った言葉が頭に浮かんだ。

「伝えるなら、その場でじゃよ。  
後から言っても半分も伝わらんわい」

そうだよな。  
頑張りを認めるならその場でだよなあ。  
シフトのお願いのときに言っても  
イヤらしく聞こえるだけだよな。

オレはちょっとだけ勇気を出してみようと思った。

ピークが落ち着くと、  
レイジはたまったグラスを洗っていた。

レイジの頬は今日も汗で光っているが、  
さすがに少し疲れているようだ。

手が止まってしまうタイミングが多く見えた。

オレはレイジに声をかけた。

「レイジ」  
「あ、店長、今日もスゴかったっすねえ」

ゴクッとつばをひと飲みして続ける。

「そうだな。今日も大変だったろう」

「……？」

レイジは不思議そうにオレの顔を見つめる。  
少し、緊張が高まった。

「レイジがドリンク場に入ってくれと助かるよ」

「…はい！昨日はお休みだったから  
今日は元気満タンですよ！」

レイジの表情からは、疲れが飛んでいくように見えた。  
頬を流れる汗がキラキラと光る。白い歯が明るくかがやく。

「そろそろ上がりの時間だろ。  
今日は大変だったからキリのいい所で上がってくれ、  
後はオレがやるから」

「大丈夫ですよ！  
もう少しですから、がんばります！」

「そうか、ありがとう。  
じゃもうチョイ頼むよ」

「はい！」

ドリンク場を片付けるレイジは、  
今シフトインしたみたいに元気に動き出した。

オレにも、また力が湧いてきた。  
今日の疲れは何だかとても心地がいい。

(おわり)

物語製作 : ファン促物語ライター 眞喜屋 実行 (まきや さねゆき)

<http://haps.chu.jp/fansokustory.html>

株式会社はぴっく [hapic@mirror.ocn.ne.jp](mailto:hapic@mirror.ocn.ne.jp) 担当 : まきや  
あなたのオリジナル物語を製作します。お気軽にご相談ください。